

コラム 争いを避けて生きる コケ植物のしたたかな生存戦略

小さいためか、見過ごしてしまうことの多いコケ植物。そんな目立たない彼らは、他の植物とは少し異なる生き方をしています。他の植物との競争をできるだけ避けるのもそういった工夫の一つです。ここでは3つの視点からそんな彼らの生き方を見てみましょう。

変水性 「へんすいせい」と読みます。反対語は恒水性。ちょうど変温・恒温と同じ関係です。周囲の湿度や水分に影響されて、体内の含水量が容易に変動する性質です。日中強く乾燥する場所、例えば河原の岩の上、コンクリートの壁、ときには木の枝から垂れて生活する種類で特によく発達しています。乾燥すると植物体はカラカラに乾くのですが、死んだわけではなく干物のような状態でじっと息をひそめて休眠しています。雨が降ったり朝露に濡れると、体の表面からすばやく水を吸収してもとのみずみずしい姿に戻り光合成を再開します。乾燥に逆らわず身を任せることで、他の植物が利用できない場所に自分のすみかを確保しているのです。



写真：(左) 道路沿いのコンクリート法面に直接生えて大群落をつくるハマキゴケ。(中) ハマキゴケの拡大。左は乾燥、右は霧吹きで水をかけて湿った状態。(右) タカサゴサガリゴケ。木の枝から垂れさがって生育し、空気中の湿度を利用して生きている。

早春の新緑 コケ植物は小さいので光をめぐる競争は苦手です。そこで編み出した手段が、上空を覆う木々よりも早く早春から新しい葉を展開することです。コケ植物は常緑なのですが毎年新しく伸びる枝があり、ここでは光合成も活発です。五月の連休を過ぎると関西地方では落葉樹が新しい葉を展開してコケ植物が生きている地面が暗くなってしまいます。その前に一生懸命光合成を行うのです。福寿草などの早春植物と似た生き方です。



写真：(左) 地面に薄く広がるホソバキナゴケ。(中) 3月上旬に新しい葉を展開するコバノチョウチンゴケ。(右) 春先の里山でよく見かける、タマゴケの若い胞子体。

水との深い関わり 変水性とは逆ですが、原始的な陸上植物であるコケ植物は水と深い繋がりをもっています。手水鉢がコケ植物で覆われているのはよく見かける風景です。また、ミズゴケ湿原のように、他の生物が利用する環境そのものをコケ植物がつくりあげることもあります。地球の全陸地面積のおよそ2%がミズゴケで覆われていると知ったら驚かれるでしょうか。水面をただよいながら生きるコケさえるのです。 秋山弘之(自然・環境評価研究所)



写真：(左) ミズゴケ湿原のオオミズゴケ。(中) イチョウウキゴケは水面をただよいながら生活する唯一のコケ植物。(右) 趣を感じさせる、ミズシダゴケに覆われた手水鉢。

特集

ひょうご・ふるさと ミュージアムプロジェクト



海岸の漂着物も地域の学びの素材になる